

【発表要旨 1】

ヘラルト・ダーフィット作《キリスト洗礼》三連画試論

藤村拓也（九州大学大学院）

ヘラルト・ダーフィットは 1498 年にブルッヘ市庁舎を飾る裁判画を完成させ、1501 年には同市の画家組合長に就任した。富裕層から注文を受け始めたことも、彼が名実ともに都市を代表する画家となったことを示している。その頃に制作された《キリスト洗礼》三連画（1502～1507 年頃、ブルッヘ、フローニンゲン美術館）は、前景に敷き詰められた草花や中景に繁茂する木々、波打つ水面などの洗練された自然描写からダーフィットが円熟に達したことがうかがえる作品として重視されてきた。注文主や来歴が判明している点においても重要な作品であるが、外翼パネルの加筆や特殊な図像、そして寄進と設置場所に関する記録が本作の制作動機や意味内容についての考察を複雑なものにしている。

本発表では、まず《キリスト洗礼》三連画の外翼パネルに関する新たな図像解釈の可能性を指摘したい。他の三連画と同様、注文主ヤン・デス・トロンペスが三連画内側左右パネルに第一妻と子供たちとともに描かれている一方で、外翼パネルには（後に加筆された）第二妻と娘が聖母子に対面するという当時の二連画を想起させる珍しい構図が用いられているのである。幼子キリストが葡萄を祈祷者に渡そうとする特殊な図像が採用されていることも特筆すべき点である。以上の肖像加筆の意味と葡萄の象徴性については類例との比較から考察がおこなわれているが、発表者はこの特殊な図像が「キリスト洗礼」を中心主題とする三連画の外翼パネルであることに注意を喚起したい。くわえて葡萄というモチーフだけではなく、幼子キリストが誰かとコンタクトをとる類例の考察を通じて、この外翼パネルが「キリスト洗礼」の予型論に基づく図像である可能性を提示する。

続いて「キリスト洗礼」を中心とする本作の意味内容を、関連記録と設置場所との比較検討から明らかにしたい。本作は 1520 年の記録から、同年に注文主の第三妻とその後夫によってブルッヘの聖バシリウス聖堂内の祭壇に設置されたことが判明している。同記録にはおこなうべきミサや慈善活動が規定されており、まずそれらと本作の関連を当時の類似作例・事例から検討する。また注文主没年から四年後に聖バシリウス聖堂に設置されたことから、本作が制作当初から同聖堂内に設置されることを企図した可能性は軽視されてきた。しかし、同所が重層的なコンテクストを有する都市の要地であったことから、先の可能性は検討に値すると発表者は考える。最後にこの設置場所をめぐるコンテクストと本作を照合することで、「キリスト洗礼」を中心主題とする本作のメッセージを多角的に捉えてみたい。

【発表要旨 2】

ドイツの博物館に所蔵される韓国美術について

マーヤ・シュティラー（九州大学大学院訪問研究員）

この発表の主な目的は、ドイツの博物館・美術館に所蔵される韓国美術のコレクション、特に仏教美術のコレクションを紹介することにある。

第一章では、ドイツの韓国美術コレクションについて紹介したい。近年の研究によれば、現在ドイツに所蔵される韓国美術は 7.500 点に及び、近代美術の作品を含めれば 8.000 点以上になるという。作品は 19 世紀の民族的なものが最も多く、これは 19 世紀中期からハンブルグ、ベルリン、ミュンヘンといった大都市に民族博物館が相次いで設立され、それらの博物館が全世界の民族の作品を収集する(salvaging paradigm)ことを方針としたためである。

しかしこのときの朝鮮半島踏査では、この土地に収集する価値のある作品は少ないと報告され、朝鮮半島の文化に対してあまり関心は払われなかった。このために、現在ドイツにある朝鮮半島美術のコレクションは、中国美術や日本美術のコレクションに比べて非常に少ないものとなったのである。また 19 世紀後半のドイツ人旅行者の土産品が、100 年前に博物館に寄贈されたまま保管されているが、そうした古いコレクションの調査もいまだ完結していない。これは、ドイツに韓国美術史のキュレーターがいないことが主な原因となっている。

中国や日本は、国際交流を通じて 16 世紀からヨーロッパによく知られていたが、それに対して朝鮮半島は、当時輸出品もなく、万国博覧会 (world exposition) においても工業化した当時の様子を知られることがなかった。つまるところ 20 世紀後半以前のドイツは、韓国文化に対する関心があまりなかったといえる。たとえば、大学に韓国学部が初めて設立されたのは 1970 年代であったし、19 世紀、東洋美術史を勉強するドイツ人は、日本文化に対する関心が一番高かった。朝鮮半島にかんしては、日本人研究者の視点から、日本文化の起源を知るために朝鮮半島の文化を勉強していたという。

既に述べたように、ドイツにおける韓国美術コレクションの大多数は民族芸術であり、仏教美術の作品は約 21 点ほどである。第二章では、ケルン東洋美術館蔵の 8 点、ハイデルベルグ民族博物館蔵の 1 点、ベルリン東洋美術館蔵の 2 点、ハンブルグ民族学博物館蔵の 10 点を紹介し、このうちまだ出版されていない仏教美術作品についても紹介する。そして最後に、ケルン東洋美術館蔵の釈迦説法画の調査結果を発表する予定である。